

Title	突厥「阿史那感德墓誌」訳注考：唐羈縻支配下における突厥集団の性格
Author(s)	齊藤，茂雄
Citation	内陸アジア言語の研究. 26 p.1-p.38
Issue Date	2011-08
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50619
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

突厥「阿史那感德墓誌」訳注考 ——唐羈縻支配下における突厥集団の性格——

齊 藤 茂 雄

1. はじめに

一時は中央ユーラシアの覇権を握るにいたった突厥第一可汗国（552～630年）は、583（開皇三）年の東西分立（東突厥／西突厥）の後、唐の攻撃によって頡利可汗が捕縛されて630（貞觀四）年に滅亡する。その際、多くの突厥遺民が唐国内に流入してきたため、唐はゴビ以南の陰山周辺からオルドスを中心とする遊牧可能地域（＝漠南）に、突厥羈縻州を配置し間接統治した。それゆえ、突厥が唐に服属しているこの時代を羈縻支配時代（630～682年）と呼んでいる。しかし、突厥は漠南で三度にわたる反乱を起こし、ついに突厥第二可汗国（682～744年）として復興する。

突厥の羈縻支配時代に関しては、羈縻州⁽¹⁾の沿革と統治体制を論じた先行研究〔岩佐 1936, pp. 79-100；石見 1987；呉 1998, pp. 227-272；呉 2000〕がある一方で、墓誌史料を利用して突厥の有力者を個別に分析する先行研究がある。というのも、唐の支配下に入り官称号を与えられた突厥遺民の中には、王族である阿史那氏の可汗の子孫も含まれており、彼らの中には唐国内で代々官職を得て家系を継ぎ、墓誌が作成された者も存在しているからである。そ

(1) 羈縻州自体は突厥だけでなく服属した様々な民族に対して設置され、その運用法も地域ごとに異なっていたとされる〔石見 1998a, p. 155〕。羈縻州に関する包括的な研究は石見 1998a, p. 174, nn. 1, 2；荒川 2010, p. 12, n. 30 に引用された文献などを参照のこと。また、安西都護府治下のオアシス諸王国に対する羈縻支配の実態に関して、羈縻支配が従来の国王を中心とする都督府と唐の鎮守軍とによる二重支配体制であったことについては森安 1984, pp. 52-54；Zhang / Rong 1987, pp. 90-91；張／榮 2008, pp. 111-117；荒川 1997, pp. 10-16 を、唐羈縻支配下の交通体制については荒川 2010, pp. 272-331 を参照のこと。

して、現代になって発掘されたそれらの墓誌を検討することで、漢籍史料中には一切現れてこない羈縻支配時代の状況が把握できるのである。ちなみに、現在までに検討が行われたのは、処羅可汗の子孫である摸末〔氣賀澤 2009, p. 11, 番号 342；葛 2006, pp. 140-147〕・施〔氣賀澤 2009, p. 113, 番号 2858；石見 1998b, pp. 179-204〕・哲〔氣賀澤 2009, p. 113, 番号 2859；石見 1998b, pp. 191-193〕の3代、他鉢可汗の孫である思摩〔氣賀澤 2009, p. 11, 番号 292；岳 1995；鈴木 2005〕、葉護可汗・処羅侯の孫に当たる忠〔氣賀澤 2009, p. 53, 番号 1396；陳 2002〕とその曾孫の瓘〔毛 2006, pp. 82-84〕といった人々である〔系図参照〕。そして、本稿で扱う「阿史那感徳墓誌」の主人公もまた、頡利可汗の曾孫に当たる人物であり、665（麟徳二）年に生まれて691（天授二）年に27歳の若さで洛陽において死去した。ただし、漢籍史料中からは一切その存在が知られていない。

本墓誌は、2000年に中華人民共和国洛陽市から出土し、2004年に趙振華氏によって録文が発表されて学界に紹介された〔趙 2004〕。しかし、趙 2004では拓本写真が掲載されなかったため、検証できない状況にあった。その後、本墓誌は『補遺』, pp. 302-304にも録文が収録された⁽²⁾が拓本写真は依然として公開されず、やはり利用に難があった。その後、張／張 2009, p. 187, 図 111に拓本写真が掲載されたものの、写真が小さすぎたため文字の判読には到らなかった。

このような状況は2009年になって趙氏の論文集が出版され、その中に収録された趙 2004の増訂版に本墓誌の鮮明な拓本写真が付されたことで解消された。こうして、本墓誌は行割りや改行空格、則天文字の使用状況など、全貌が知られることとなったが、同時に『補遺』, 趙 2009ともに録文が一部誤っていたことも拓本写真の精査から判明した。そこで本稿では拓本写真から新たに釈読を行い、それに基づいて本墓誌の訳注を行う。

(2) 本墓誌は張 2009, pp. 102-103にも録文が掲載されているが、不完全で誤りが多いため、本稿では参照しなかった。

(3) 巻頭（Plate I）に趙 2009, p. 485掲載の拓本写真を転載している。転載を快諾してくださった趙振華先生にこの場を借りて心より御礼申し上げます。

そのうえで、本墓誌の背景を歴史学的に考察する。これまで、本墓誌を用いた歴史学的な研究として趙 2009 の他に朱 2010a があるが、両者ともにその関心は阿史那感徳が漢人風の名・字を帯びていることや、葬送の習俗が突厥のそれと異なり漢人と同じになっていることなど、感徳が「漢化」しているという点 [趙 2009, p. 481; 朱 2010a, pp. 200-202] にある。しかし、筆者の関心はそれとは異なり、羈縻州支配の中で彼がどのような役目を果たしたかという点にある。そこで、筆者は感徳の婚姻形態と、感徳が唐⁽⁴⁾から帰義可汗に擁立されている点とに注目して検討を行うことにより、第二可汗国復興期における突厥遺民がいかなる集団であったのかを考察し、その中で感徳がいかなる役割を演じたのかを検討してみたい。

2. 訳注

【基礎的情報】

本墓誌は、趙 2004, p. 82 によれば、正方形で1辺約 75 cm、厚さ約 15.5 cm、楷書で 45 字 × 45 行ある。墓誌蓋は1辺約 76.5 cm、厚さ約 13 cm であり、4 字 × 4 行の篆書で「大周故冠軍大將軍帰義可汗阿史那誌」とある。墓誌・墓誌蓋ともに現在は河南省洛陽市にある関林廟洛陽古代石刻藝術館に収蔵されている⁽⁵⁾。

また、本墓誌では、「天」(𠀤)、「地」(𡿨)、「日」(☉)、「月」(☾)、「星」(○)、「年」(𠂔)、「正」(𠂔)、「君」(𠂔)⁽⁶⁾、「臣」(𠂔)、「載」(𠂔)、「授」(𠂔)の各字で則天文字が利用されているが、録文では便宜上、通用字で釈読している。

(4) 阿史那感徳が生きた時代は、ちょうど則天武后が政權を握り、中宗・睿宗の二子を傀儡とした上で唐を廃して周を建国した時期に当たる。それゆえ、唐と武后は厳密に言えば峻別されるべきであるが、本稿では便宜的に武后期でも「唐」と表記している。

(5) 2009 年に洛陽で本墓誌を実見した龍谷大学の中田裕子氏からも、ほぼ同じ計測結果をご教示いただいた。中田氏に心より御礼申し上げたい。

(6) 1・30・44 行目の「君」は、「君臣」の「君」の意味で使用されていないため、通常字が用いられている [cf. 蔵中 1995, p. 156]。

45. 44. 43. 42. 41. 40. 39. 38. 37. 36. 35. 34. 33. 32. 31. 30. 29. 28. 27. 26. 25. 24. 23.

木西環火徽南臨冰洲北望咸承正朔並入提封重開獎授之榮再下優矜之

制天授元年九月廿九日

制曰代雄蕃落夙慕皇風響重金河聲高玉塞屬大周開曆寶運惟新宜敷天授之恩俱沐遷榮之曲可冠軍大將軍行右鷹揚衛大將軍漢朝外戚始有冠軍之寵晉國名臣方就鷹揚之選羽林上將吐光景於星街文衛雄班翊戎麾於

帝座享年不永與善無徵嗚呼哀哉以天授二年正月十八日遭疾薨於從政里之私第春秋廿有七管仲云亡齊桓不樂顏回既沒夫子長嗟行路興哀春人罷相九泉無寄百身何贖惟可汗神情俊拔眉目疎朗以禮交人不矜於物椅桐梓漆擢秀於君子之林珠玉寶貝晉燭於賢人之室雅好博古束先生可以神交譽重當時賈太傅自然冥會每以青春花柳紫陌煙先臨曲池以賦詩對厝轡而命賞輕財重施鸞義賈仁雖雨壞屋崩固不容於鄰婦而塗窮糧絕信無棄於行人勿以跪足狼山實可圖形麟閣爰有

制命令七品官一人監護墳域所須並令官給墳如馬鬣路似羊腸萬古巋然百齡已矣夫人阿史德即鎮軍大將軍行右武衛大將軍兼定襄都督五州諸軍事右羽林軍上下五原郡開國公之第二女也常娥資其魄寶婺寄其英素有風孟母之三徙夙慕禮範楚妃之一笑豈直椒花作頌柳絮飛文竟聞姜氏之賢乃著曹妻之誠鵲巢流詠光被夫人之詩鷄鳴作歌實有今嬪之德天下少匹海內無雙寶婦喪夫貞姜無子殷憂歲序契闊尋常主鬯徒勤瞻言遂絕雲飛寡鶴幾聞淒斷之聲鏡掩孤鸞獨下傷心之淚即以天授三年歲次壬辰壹月壬午朔卅日景申歸厝於神都城南羣圭鄉之禮也背輓輶而倭溫洛前

鳳闕而後龍門路直城迴繁筵咽而還續風悲氣勵疊鼓紛其送警

滕城馬蹕見之者幾年丁公鶴鳴聞之者何歲乃為銘曰
龍城北阜鵲壑南通地偏荒裔人實豪雄單于舊俗老上遺風英威夙振盛業遐隆

其一

臣惟待主鳥思擇木鶴鳴在皋

鴻漸于陸天之驕子是名日逐斂衽

皇階承榮代祿其二其有唐御寓行當典武玉冊光臨金堂乃輔由余作相日碑事主万古同風於焉可取其三賢臣嗣絕與國亡不有興也其何以昌命茲厥胤紹尔賢王仍韜禁略式衛巖廊蒼舒幼敏顏回早喪地立孤墳人依薄葬山崗北峙松門西望死而有知禮成無讓

五其

幽泉無日隴樹徒春不知此地曾留幾人山殘白雪路暗黃塵于嗟君子遺恨真嬪

【錄文】

1. 大周故冠軍大將軍行右鷹揚衛將軍歸義可汗阿史那府君墓誌銘并序

2. 可汗諱感德字尚山長城陰山人也天分九野地列八荒卯宿紀其躔次習坎帶其區域英靈盼嚮有單于之異人物產瑰奇有祁連之俊寶康莊四會玉塞峙其南土宇三分金河更其北懸峯秀拔龍門鎮地之山沃野平開雞秩安居之境昔者大君有命夏后之裔實號淳維中國要盟老上之宗是稱驕子曾祖咄苾頡利可汗獵騎五千振雄風於絕漠控弦十萬飛猛氣於偏荒未失燕支之山幾撓琉璃之酒橫分右地高視上京泊周歷秦阻威怙重雖哥鍾二肆魏絳有以和戎而步卒五千李陵竟為降將彼則高闕作鎮此亦長城設險甘泉宮裏屢警危烽踈勒城中時聞涸井屬隨氏版蕩鹿走秦郊唐運天開龍飛晉野神功不有大朴難名削跡幽都輸誠魏闕貞觀四年歸順授右衛大將軍贈歸義郡王食邑三千戶祖特勤本蕃葉護父伽那左衛郎將可汗視繼天之重葉護比明離之貴鈞陳設衛職典於兵鈐郎將司階業宣於傳警家藏道德代襲簪纓韓有望拜之稿曰碑有忠臣之傳

10. 天子有命玉冊金繩諸侯計功白茅玄土是知一日千里自北徂南四代五公生子及父可汗幼而道不行孔宣父之心事非禮不動陸內史之生平子政則流略兼通蔓倩則經史足用詞峰聳迴仰之弥高學海浮雲酌而不竭尤工武藝雅尚兵韜弓則顏高之六鈞射則養由之百中馬蹄為的何慙魏后之書鸞頷成封自得班超之相既而謳歌去亳曆數歸

周乾文清而百度理

15. 帝道亨而萬人泰鄴侯末胤先崇沛邑之封丞相玄孫遂纂扶陽之業垂拱三年歲次丁亥二月乙未朔十一日乙巳皇太后若曰於戲乾坤覆載揔區宇而陶甄日月環周一晷度而臨照咨尔故左威衛大將軍頡利可汗贈歸義郡王阿史那咄苾曾孫感德惟尔遐僻阻絕風猷我國家括地受圖補天立極威懷不二吊伐無私用在尔先自貽剿覆代經三葉頗味樞而知恩年深五紀將處麻而就直是用命尔為歸義可汗嗣守蕃葉嗚呼念哉敬尔威儀慎尔侯度庶幾寵命保乂無疆可不慎歟虔膺

寶命允當天心望攝龍庭聲振鵬海永昌元年九月授右豹韜衛將軍

黃樞警衛

紫掖嚴更

天子知其重臣其僚推為國器

聖神皇帝坐明堂而朝海內登泰階而有天下坤作成物河出圖而洛出書乾知太始星重光而月重曜扶桑東泊弱

【書き下し】

(I.1) 大周・故冠軍大將軍・行右鷹揚衛將軍・歸義可汗・阿史那府君の墓誌銘、並びに序

(I.2) 可汗、諱は感德、字は尚山、長城陰山の人なり。天は九野に分かれ、地は八荒を列ね、卯宿は其の躔次を紀め、習坎は其の区域を帶ぶ。英靈は盼嚮して、單于の異人有り、物 (I.3) 産は瑰奇にして、祁連の俊宝有り。康庄は四会するに、玉塞は其の南に峙ち、土宇は三分するに、金河は其の北に更ぐ。懸峰 秀拔なる竜門は鎮地の山なり。沃野 平開なる雞秩は安居 (I.4) の境なり。昔者、大君 命を有つに、夏后の裔は実に淳維と号す。中国 盟を要むるに、老上の宗は是れ驕子を称す。曾祖の咄苾は、頡利可汗なり。獵騎は五千、雄風を絶 (I.5) 漠に振るい、控弦は十万、猛氣を偏荒に飛ばす。未だ燕支の山を失わずして、幾んど琉璃の酒を撓す。横に右地を分け、上京を高視すれば、周に洎び秦を歴るに、威に阻り重を怙む。哥鐘二肆は、魏 (I.6) 絳の有つに戎と和すを以てすと雖も、歩卒五千もて、李陵は竟に降將と為る。彼れは則ち高闕は鎮と作り、此れも亦た長城は險を設く。甘泉の宮裏は、屢しば危烽を警め、疏勒の城中は、時に涸井を聞く。属 (I.7) 随氏 版蕩し、鹿 秦郊を走るに、唐の運は天開し、晋野に竜飛す。神功をば有たず、大朴は名し難ければ、幽都に削跡し、魏闕に輸誠す。貞觀四年に帰順すれば、右衛大將軍を授け、(I.8) 歸義郡王・食邑三千戸を贈る。祖の特勤は、本蕃の葉護なり。父の伽那は、左〔武〕衛郎將なり。可汗は繼天の重を視、葉護は明離の貴に比す。鈞陳は衛を設け、職は兵 (I.9) 鈴を典る。郎將は階を司り、業は伝警を宣ふ。家に道德を蔵め、代よ簪纓を襲う。呼韓に望拜の稿有り、日磾に忠臣の伝有り。(I.10) 天子 有命するは、玉冊・金繩もてし、諸侯 計功せらるるは、白茅・玄土もてす。是れ一日千里にして、北より南に徂ぎ、四代に五公、子を生めば父に及ぶを知る。可汗は幼くして (I.11) 道行わざれば、孔宣父の心事なり、礼に非れば動かず、陸内史の生平なり。子政なれば則ち流略兼ねて通じ、蔓倩なれば則ち經史用うるに足る。詞峰は聳え廻り、之れを仰げば弥いよ高く、学海は雲を浮べ、(I.12) 酌めども竭きず。尤も武藝を工みにし、

雅に兵韜を尚ぶ。弓なれば則ち顔高の六鈞にして、射れば則ち養由の百中なり。馬蹄 的と為るは、何ぞ魏後の書に慙じん、鸛頷 封を成すは、自ずから班超の (I. 13) 相を得ればなり。既にして謳歌せられて毫を去り、曆数は (I. 14) 周に帰せば、乾文は清くして百度は理まり、(I. 15) 帝道は亨りて万人は泰し。鄧侯の末胤は、先より沛邑の封を崇び、丞相の玄孫は、遂に扶陽の業を纂ぐ。垂拱三年歲次丁亥二月乙未朔十一日乙巳、(I. 16) 皇太后 曰うが若くんば、「於戲、乾坤覆載は、区宇を総べて陶甄し、日月の環周は、晷度を一にして臨照す。咨爾、故左威衛大將軍頡利可汗・贈歸義郡王・(I. 17) 阿史那咄苾の曾孫の感徳よ、惟だ爾の遐僻のみ阻絶するも風猷せらる。我が国家は括地受図し、補天立極するに、威懷は二つにせず、弔伐は私無ければ、用いるは爾の先より在り、自ら剿覆せるを貽す。代は (I. 18) 三葉を経れば、頗ぶる榘を味わいて恩を知り、年は五紀に深く、麻を処するを将て直と就す。是を用て爾に命じて歸義可汗と為し、蕃葉を嗣守せしめん。嗚呼、念えよ。爾の威儀を敬しみ、爾の侯度を慎ませよ。寵命を庶 (I. 19) 幾えば、保父すること疆り無からん。慎わざるべきか。虔しみて宝命を膺け、天心に允当すれば、望は竜庭を損き、声は鵬海に振るわん」と。永昌元年九月、右豹韜衛將軍を授かる。(I. 20) 黄樞をば警衛し、紫掖をば嚴更すれば、(I. 21) 天子は其の重臣たるを知り、其の僚は推して国器と為す。(I. 22) 聖神皇帝は、明堂に坐して海内に朝し、泰階に登りて天下を有つ。坤は成物を作し、河は図を出し洛は書を出す。乾は太始を知どり、星は重ねて光り月は重ねて曜く。扶桑は東に泊び、弱 (I. 23) 木は西に環り、火微は南に臨み、氷洲は北に望む。咸な正朔を承け、並びに提封に入る。重ねて奨授の榮を開き、再び優矜の (I. 24) 制を下さる。天授元年九月廿九日、(I. 25) 制して曰わく、「代よ蕃落に雄たるも、夙に皇風を慕えば、誉は金河に重く、声は玉塞に高し。属 大周 開曆し、宝運は惟れ新たなり。宜しく天授の恩を敷き、俱に遷榮の曲に沐すべし。冠軍大將軍・(I. 26) 行右鷹揚衛大將軍を可とす」と。漢朝の外戚、始めて冠軍の寵有り、晋国の名臣は、方めて鷹揚の選に就く。羽林の上将は、光景を星街に吐き、文衛の雄班は、戎麾 (I. 27) を (I. 28) 帝座に翊く。享年永

からず、善に与^{くみ}するも微無し。嗚呼^あ哀しきかな。天授二年正月十八日に疾に遘^あうを以て、従政里の私第に薨る。春秋は廿有七なり。管仲 云亡するや、齐桓（I. 29）楽しまず、顔回 既に没すれば、夫子 長嗟す。行路は哀を興し、春人は相するを罷む。九泉に寄する無くも、百身もて何ぞ贖わん。惟れ可汗 神情は俊拔にして、眉目は疏朗なり。礼を以て人と交わり、物を矜^{おこ}しまず。（I. 30）椅・桐・梓・漆は、君子の林に擢秀され、珠玉・宝贝は、燭を賢人の室に晋^{すす}む。雅に博古を好めば、束先生は以て神交すべし。誉は當時に重ければ、賈太傅は自然と冥会せん。毎に（I. 31）青春に花柳たり、紫陌に煙先だつを以て、曲池に臨むに賦詩を以てし、層巒に対して賞を命^{もち}いる。財を輕んじ施しを重んじ、義を鬻^{ひさ}ぎ仁を^か買う。雨 屋を壊し崩るるも、固く隣婦を容れずと雖も、塗窮まり糧絶うるも、（I. 32）信^{まこと}に行人を棄つる無し。狼山に踴足するを以てする勿く、実に麟閣に図形せらる。爰に（I. 33）制命有り、七品官一人をして、墳域を監護せしめ、須いる所は並びに官給せしむ。墳は馬鬣の如く、路は羊腸に似て、万古に巋然とし、百齡なるのみ。夫人の阿史徳なれば即ち鎮軍大將軍・（I. 34）行^マ右武衛大將軍兼定襄都督・五州諸軍事・右羽林軍上下・五原郡開國公の第二女なり。常娥は其の魄を資け、宝婺は其の英に寄す。素より（I. 35）家風有ること、孟母の三徙、夙に礼范を慕うこと、楚妃の一笑なり。豈に直だ椒花 頌と作り、柳絮 文を飛ばすのみならん、竟に姜氏の賢を聞き、乃ち曹妻の誠を著す。鵲巢は詠を流すに、光^{あま}ねく（I. 36）夫人の詩を被り、鷄鳴は歌を作すに、実に今の嬪の徳有り。天下に匹^{たぐ}う少なく、海内に双^{なら}ぶ無し。賈婦 夫を喪い、貞姜 子無ければ、歳序を殷憂し、尋常を契闊す。主鬯して徒らに勤むるも、瞻言は遂に（I. 37）絶う。雲飛する寡鶴より、幾くか悽断の声を聞き、鏡 孤鸞を掩うに、独り傷心の涙を下す。即ち天授三年歲次壬辰壹月壬午朔卅日景申を以て、神都（I. 38）城の南の單圭郷に帰厝するの礼なり。輶輶を背にして温洛^{むか}に俵い、鳳闕を前にして竜門を後にす。路は直く城は廻り、繁筍は咽びて還た続く。風は悲しみ気は励み、晝鼓は其の警を送るに紛る。（I. 39）滕城に馬^{むせ} 蹢^{せぐま}り、之れを見る者は幾年なるか。丁公は鶴鳴し、之れを聞^{つく}く者は何れの歳なるか。乃ち銘を為りて曰わく、（I. 40）

竜城は北のかたに^{さか}阜え、鵬壑は南のかたに通ず。地は荒裔に偏り、人は豪雄^{みた}を^み突す。单于の旧俗、老上の遺風あり。英威は夙に振い、盛業は^{はる}遐かに隆し。其の一なり。臣は主を待つを惟い、鳥は択木を思う。鶴は鳴きて皋に在り、
(I. 41) 鴻^{かり} (陸)〔遼^{くもい}〕に漸^{すす}む。天の驕子、是れ名は日逐なり。(I. 42) 皇階に
斂衽し、榮を承け禄を代う。其の二なり。有唐 御宇するに、行^{まさ}に典武に当る。
玉冊 光臨するに、金堂に乃ち輔く。由余は相と作り、日碑は主に事う。万
古より風を同じくすれば、焉に於いて取るべし。其の三なり。賢臣は嗣絶し、
与 (I. 43) 国は云亡す。興有らざるや、其れ何を以て昌えしめん。茲に厥の胤
に命じ、爾に賢王を紹がしむ。韜に仍り略^{つつ}を禁^{のつと}しみ、式りて巖廊を衛れ。〔其
の四なり。〕蒼舒は幼きより敏くも、顔回は早くに喪す。地に孤墳を立て、人
は薄葬に依る。山崗は (I. 44) 北に峙ち、松門は西に望む。死するも知有
り、礼成るも譲る無し。其の五なり。幽泉は無日にして、隴樹は春を徒らに
す。此の地を知らずして、曾て幾人を留めん。山に白雪残り、路は黄塵に暗し。
于^あ嗟^あ君子、(I. 45) 真の嬪を遺恨せられんことを。〔其の六なり。〕

【語釈】

語釈は、主に歴史的事項に関わるものと、先行研究との字句の異同に関わるもの限定している。典拠の説明は、煩雑になるため原文を引かなければ解釈しにくい一部を除いて省略し、和訳において注で典拠元を示している。

1-1.「行右鷹揚衛將軍」 鷹揚衛は唐の禁軍である十二衛のひとつ、『唐六典』卷二四「左右武衛」(中華書局標点本, p. 620)に、「光宅元(684)年、改めて左右鷹揚衛と為す。神龍元(705)年、故に復す(光宅元年、改爲左右鷹揚衛、神龍元年、復故)」とあって、則天武后期に武衛を改称して鷹揚衛とした。十二衛將軍は従三品。ここでは冠軍大將軍の正三品より低いため「行」が付されていると解釈できるが、問題がある。26-1.「行右鷹揚衛大將軍」の項を参照のこと。

2-1.「紀其躔次」 趙2009は「其」と「躔」の間に「距」を入れるが、衍字である。

2-2.「盼嚮」 趙2009は「盼響」、『補遺』は「盼響」とするが、改める。目を

かけて共鳴する意と取った。

3-1.「金河」 陰山山中から、呼和浩特を通過して黄河に注ぐ、現在の大黒河のこと [巖 1985, pp. 221-222]. 第一可汗国崩壊後の羈縻支配時代にも、突厥遺民の統括拠点である单于都護府ならびに定襄都督府がそれぞれ、金河最下流にあたる現在の托克托付近と和林格爾県土城子遺跡に置かれている [齊藤 2009, pp. 25, 30-31]. 突厥とゆかりが深く、突厥の領域を象徴している。

3-2.「龍門」 『遼史』 卷四一「地理志五 西京道奉聖州 竜門県条」(中華書局標点本, p. 510) にある「竜門山」のことで解釈する趙 2009, p. 475 に従う。

6-1.「屬随氏版蕩〜龍飛晉野」 隋末に群雄が割拠し、唐の高祖李淵が 617 (大業十三年) に太原から勃興したことを指す。ほぼ同文が「阿史那施墓誌」及び「阿史那哲墓誌」に引用されている『大唐実録』にあり、本箇所の特勤とされている可能性がある [cf. 石見 1998b, pp. 181, 196-201].

8-1.「祖特勤本蕃葉護」 「特勤」とは古代トルコ語の *tegin* の音写であり、阿史那氏の可汗子弟が帯びる「王子」を意味する称号である [ED, p. 483]. 本墓誌では感徳の祖父の名として特勤が現れるが、そもそも「特勤」は人名要素ではなく称号であるうえ、通常は「○○特勤」とするのが普通である。それゆえ、感徳の祖父の記録は不完全なものであり、彼は唐側に本名すら記録されていなかった可能性が高い。突厥における称号は記されているにもかかわらず、唐における官職が記されていないこととあわせて考えれば、彼は唐に降る前に死去し、それゆえ記録が残らなかったと考えるべきであろう。一方、「葉護」とは同じく古代トルコ語の *yabγu* の音写である。護雅夫氏によれば、葉護は突厥建国当初においては可汗に次ぐ地位を占めており、第二可汗国になると、一時的にはあるがタルドゥシュ *tarduš* 部の長であるシャド *šad* とならんでテリス *tölis* 部の長の称号となり、第二可汗国の両翼体制を構成することとなるという [護 1967, pp. 35-37, 281, n. 21]. いずれにしろ、葉護は可汗に次ぐ地位の称号だったのであり、特勤は頡利可汗の子弟の中でも高い地位を占めていたと考えられる。稿末の系図で彼を頡利可汗の長子としたゆえんである。

8-2.「父伽那」 この人物も漢籍には一切情報がない。しかし、彼の墓誌が1990年代に西安市長安区紀陽郷周村北磚場から出土し、現在は同市長安区博物館に所蔵されている。いまだにそのテキストは公表されていないが、断片的な紹介によれば、この人物は忠武將軍行左武衛郎将となり咸亨二(671)年に洛陽の道術里で死去したという〔徐／李2006, p. 307; 朱2010b, pp. 174-175, n. 149〕。職事官が「阿史那感德墓誌」の記述と矛盾するが、当人の墓誌の記述を採るべきだろう。感德が入った鷹揚衛は武衛を改称したもので、親子で同じ衛に仕えたことになる。

12-1.「魏后」 三国魏の武帝曹操を指すとする趙2009, p. 478に従う。しかし、文全体の典拠は不明である。

16-1.「皇太后」 則天武后のこと。夫である高宗が弘道元(683)年に死去したため、皇太后となった。『旧唐書』卷六「則天皇后紀」(中華書局標点本, p. 116)にある。

19-1.「保父」『補遺』の録文では「保入」に作り、確かに拓本写真を見ると二文字目は「入」に見えるが、それでは意味が通らない。ここは、趙2009の録文に従い、「保父」と読む。「保父」は養い安んずる意味。

19-2.「右豹韜衛將軍」 「豹韜衛」は唐の十二衛のうち、威衛を則天武后が改称したもの。『唐六典』卷二四「左右威衛」(中華書局標点本, p. 621)の原注には、「光宅元(684)年、改めて左右豹韜衛と為す。神龍元(705)年、復た左右威衛と爲す(光宅元年、改爲左右豹韜衛。神龍元年復爲左右威衛)」とある。

22-1.「聖神皇帝」 則天武后の最初の皇帝尊号。天授元(690)年九月九日に国号を周と改めた後、十二日(乙酉)に聖神皇帝となった。『旧唐書』卷六「則天皇后紀」(中華書局標点本, p. 121)にある。

25-1.「夙慕皇風」『補遺』、趙2009ともに「夙」ではなく「風」にしているが、拓本写真からは「夙」に見えるため、改める。

26-1.「行右鷹揚衛大將軍」 本墓誌の1行目には「行右鷹揚衛將軍」とあって、本箇所と矛盾している。鷹揚衛大將軍は正三品で散官の冠軍大將軍と同格であるため、「行」を生かすならば本箇所が誤りと見なせる。しかし、現時点で

はどちらも言い難いため、原文のままにしておく。

28-1.「從政里」 先行研究〔徐／李 2006, p. 384；趙 2009, p. 481〕で洛陽城の南西端にあった「從政坊」のことと解釈されており、これに従う。

36-1.「主𡗗」 宗廟の祭祀を掌る意。趙 2009, p. 474 は「𡗗」の字を「𡗗」と作るが、この形は「𡗗」の異体字であるため、『補遺』の録文に従う。

37-1.「景申」 十干の「丙」が唐の高祖李淵の父、李昞の諱を避けて「景」となっている〔『史諱』, p. 18〕。武周期にもかかわらず、唐の避諱が行われている点については、「契苾明碑」にも「粵に大周万歳通天元年歳次景申八月庚午朔十五日^(甲)□申を以て、咸陽県の先塋に葬る（粵以大周萬歲通而元垂歳次景申八^⑤庚午朔十五^②□申、葬於咸陽縣之先塋）」〔『金石萃編』巻七十（『石刻史料新編（一般類）』, p. 1193）〕とする例がある。

37-2.「神都」 武周政權期の洛陽のこと。光宅元（684）年に改称された。『旧唐書』巻六「則天皇后紀」（中華書局標点本, p. 117）に「〔光宅元年九月〕東都を改めて神都と爲し、又た尚書省及び諸司官の名を改む（改東都爲神都、又改尚書省及諸司官名）」とある。

38-1.「畢圭郷」 趙 2009, 『補遺』ともに最初の字を「畢」に作るが、拓本写真を見ると明らかにあみがしらがある。同じ地名は、貞元十七（801）年二月作成の宋順墓誌（『輯繩』, p. 612）では「畢閭郷」に作るが、大曆九（774）年八月作成の「席君妻楊雲墓誌」（『隋唐五代』洛陽 12, p. 55）、会昌四（844）年二月作成の「盧厚德墓誌」（劉 2000, p. 66, 図七）では、みな「畢圭郷」としている。さらに、後漢時代の洛陽宣平門外には「畢圭苑」という地名が存在しており〔『後漢書』巻八「孝靈帝紀第八」（中華書局標点本, p. 345）〕、この唐代の地名はそれに由来する可能性があるため、「畢圭郷」が正しいと解釈した。

38-2.「繁筚」 趙 2009 ならびに『補遺』ともに 2 文字目を「茄」に作るが、それでは意味が通らない。拓本写真からははっきりと竹かんむりが確認できるため、改めた。「繁筚」とは、中央ユーラシア由来の管楽器である「胡筚」を盛んに演奏する意である。

41-1.「鴻漸于陸」 鳥が天高く雲の中を飛ぶ様、『易経』「漸」(『新釈』, p. 1052) に「上九, 鴻(陸)〔達〕に漸む. 其の羽は用て儀と為すべし. 吉(上九, 鴻漸于陸, 其羽可用爲儀吉)」とある. ただし, 「鴻漸于陸」は「漸」の中にもう一箇所存在している. しかしそこには「九三, 鴻 陸に漸む. 夫 征けば復らず, 婦 孕めば育たず. 凶. 寇を禦ぐに利あり(九三, 鴻漸于陸, 夫征不復, 婦孕不育, 凶利禦寇)」とあって悪い卦である. ここは「陸」を「達」の誤写と解釈する説[cf. 『新釈』, pp. 1060-1061]に従い, 上九の卦を指すと考える.

【和訳】

大周の故冠軍大將軍・行右鷹揚衛將軍・婦義可汗・阿史那府君の墓誌銘,
並びに序

可汗は, その本名は感徳, 字は尚山であり, 長城陰山(=漠南の草原を象徴)の人である. 天空は9つの分野に分かれ, 大地は(四海の外に外郭世界である)八荒が連なっており, 卯宿の星はその運行軌道を正し, (『易経』の) 習坎の卦⁽⁷⁾は, その範囲を収めている. (感徳の郷土では,) 神霊が目をかけて共鳴し, 单于(となりうるほどの) 異彩を放った人物が輩出しており, (その土地の) 産物は珍奇であり, 祁連山の優れた財宝が産出する. 四通八達の行路が交差している南方に, (西域を象徴する) 玉門関はそびえ立っており, (周の文王によって) 三分される(こともあった) 天下⁽⁸⁾のその北方に, (突厥の領域を象徴する) 金河が繋がっている. 陰しく突出した竜門は地を安んじる山である. 肥沃で開けた(匈奴の領域にあった) 雞秩山⁽⁹⁾は安寧居住の地である. かつて, 天子が天命を受けたところ, (匈奴にまつわる伝説にあるように,) 夏后氏の末裔はまことに(匈奴において) 淳維と号したのである. 中国(前漢)が盟約を結ぶことを要求すると, (匈奴で) 老上单于の一族の者は, (漢に対して自らを

(7) 『易経』「坎」(『新釈』, p. 569).

(8) 『論語』「泰伯第八」(『新釈』, p. 188).

(9) 『漢書』卷九四上「匈奴伝上」(中華書局標点本, p. 3786).

(10) 『史記』卷一一〇「匈奴列伝」(中華書局標点本, p. 2879).

天の) 寵愛を受けたもの⁽¹¹⁾と称したのである。

(感徳の) 曾祖父の咄苾は(突厥第一可汗国の) 頡利可汗である。(頡利可汗が) 狩獵に出る際に従う騎兵は5000騎で、(彼らは) 雄壮な氣風を草原に振るっており、(頡利可汗の) 兵力は10万人で、(彼らは) 勇猛な氣迫を荒野に飛ばしている。(匈奴が燕支山を失って嘆いた故事⁽¹²⁾とは異なり、) いまだ燕支山を失っておらず、ほとんど(羈縻を受けた者が味わえる) 琉璃の酒⁽¹³⁾をかき乱すかのよう(に朝廷を軽んじたの)であつた。意のままに(匈奴の鄧支单于が呼韓邪单于から奪った⁽¹⁴⁾ように、) 西域の地を奪い取って都(長安)を輕視し、周に至り秦を経(た匈奴のように)、權勢を頼みとしていた。2組の懸鐘という樂器を魏絳が所有したのは、異民族と和平を結んだためである(という成功譚がある)とはいへ、歩兵5000人を率いた李陵は、(漠北の匈奴を討伐しようとして) 結局は捕虜となつた(という失敗譚がある)。あちらでは(戦国趙の武靈王が築いた) 高闕が要塞となり⁽¹⁷⁾、こちらでも長城が堅固な設備となつた。(それほどの備えをしても、漢代には雍州にあった) 甘泉宮までしばしば烽火の警報が届き⁽¹⁸⁾、(後漢の耿恭が匈奴の攻撃で疏勒城中に水を失つた⁽¹⁹⁾故事のように、) 疏勒城中では時として涸れ井戸の話が聞かれる。ちょうど隋が混乱し、帝位をめぐつて群雄が割拠すると、唐建国の運が開け、高祖が太原に挙兵した。(頡利は) 神妙なる力量を持たず、質朴な道理は心に刻み込むことが難しかったので、北方の地に遁走し、(その後、) 朝廷に誠の心を捧げた。貞觀四(630)年に帰順したので、右衛大將軍を授け、帰義郡王・食邑三千戸を追贈した。祖父の特勤は、突厥本国(=第一可汗国)の葉護であつた。

(11) 『漢書』卷九四上「匈奴伝上」(中華書局標点本, p. 3780)。

(12) 『史記』卷一一〇「匈奴列伝」附『史記正義』(中華書局標点本, p. 2909)。

(13) 『周書』卷四一「庾信伝」(中華書局標点本, p. 734)。

(14) 『漢書』卷七〇「傳常鄭甘陳段伝第四〇」(中華書局標点本, p. 3008)。

(15) 『春秋左氏伝』「襄公十一年十二月条」(『新釈』, pp. 918-919)。

(16) 『史記』卷一〇九「李將軍列伝」(中華書局標点本, pp. 2877-2878)。

(17) 『史記』卷一一〇「匈奴列伝」(中華書局標点本, p. 2885)。

(18) 『史記』卷一一〇「匈奴列伝」(中華書局標点本, p. 2904)。

(19) 『後漢書』卷一九「耿弇列伝第九」(中華書局標点本, pp. 720-721)。

父親の伽那は左〔武〕衛郎将であった。可汗は天意を受け継ぐ重大な職務を負っており、葉護は太子の尊さに匹敵する。儀仗は衛兵を設けており、その職として兵権を統括している。郎将は宮殿を守っており、その業務は先払いである。家系には道徳が備わっており、代々顕貴な職を継承している。（鄧支単于と争って前漢に帰順した）呼韓邪単于⁽²⁰⁾については恭順の記述があり、（14歳で捕虜となった後、没するまで武帝に仕えた）金日磾⁽²¹⁾については忠臣の列伝がある。天子が天命を受ける際には、玉冊・金繩を用い、諸侯がその功績を計られ（封地され）る際には、（象徴として）白茅・玄土を用いる。こうしたことより、（この一族は）1日に千里走る汗血馬（のような傑物ぞろい）であり、北方（の草原）から南方（の中国）に移ってきて、4世代を経て五公（と称されるような貴人）が輩出し、子供が父に及ぶ高位に就いていることが分かるのである。

可汗感徳は、幼い頃より、世が乱れ道義が行われないので、（海に逃れてしまいたいと嘆いた）孔子⁽²²⁾のような心情であり、礼に則っていなければ行動に移さないという、（西晋の平原内史であった）陸機⁽²³⁾のような性格をしていた。（彼を例えるとして、前漢の）劉向（字は子政）⁽²⁴⁾であるならば、九流七略の前代書籍に広く通じているといえ、（前漢の）東方朔（字は曼倩）⁽²⁵⁾であるならば、経書・史書が十分使いこなせるといえる。その峰のような文辞は、高くそびえ立っていて、仰ぎ見ればますます高く、その学知の海には雲を浮かべて、汲み取ったとしても尽きることがない。武術に最も長けており、日頃より兵法書を重視していた。弓であれば、（春秋魯の）顔高のように六鈞（約46 kgの重さの）⁽²⁶⁾の強弓を引くことができたのであり、射撃すれば、（春秋楚の）養由基のように百發百中⁽²⁷⁾であった。馬の蹄が的となるとは、どうして三

(20) 『漢書』卷九四下「匈奴伝第六四下」（中華書局標点本，pp. 3798-3807）。

(21) 『漢書』卷六八「霍光金日磾伝第三八」（中華書局標点本，pp. 2959-2963）。

(22) 『論語』「公治長第五」（『新釈』，p. 105）。

(23) 『晋書』卷五四「陸機伝」（中華書局標点本，pp. 1467, 1479）。

(24) 『漢書』卷三六「楚元王伝」（中華書局標点本，p. 1928）。

(25) 『漢書』卷六五「東方朔伝」（中華書局標点本，p. 2841）。

(26) 『春秋左氏伝』「定公八年正月条」（『新釈』，pp. 1684-1685）。

(27) 『漢書』卷五一「賈鄠枚路傳第二十一」（中華書局標点本，p. 2360）。

国魏の武帝の書を恥ずかしく思おうか（典拠不詳），（侯に封ぜられるという）
 燕頡虎頡（の顔つきをした感徳）が封地を得たのは，生まれつき班超の持っ
 ていた人相を得ていた⁽²⁸⁾ からである．ほどなくして（則天武后が）褒め称え
 られて（唐に仮託されている殷の都）亳を奪い去り，天運が周に収まったの
 で，天体の運行は平穏となり，あらゆる法律制度は秩序立ち，皇帝の統治は
 順調であって，万民が安泰となった．（前漢の高祖に仕えた酈侯である）蕭何
 の末裔は，先祖代々，高祖に与えられた封地を尊重し，（前漢の）韋賢の玄孫
 は，そのまま扶陽侯を継承したのである⁽³⁰⁾（のと同様に，感徳もまた先祖からの
 高位を継承した）．（そして，）垂拱三（687）年二月十一日，皇太后（＝則天
 武后）が言うことには，次のようにあった．「ああ，天地（に象徴される皇帝・
 皇后）は，天下を統治して人々を教化し，太陽と月の巡行は，影の長短を同
 じくして照らしている．ああ，貴公こと故左威衛大將軍頡利可汗・贈煬義郡
 王・阿史那咄苾の曾孫の感徳よ，貴公のいる遠辺の地のみが（遠方にもかか
 わらず）教化されている．我が国家は大地を抱擁して帝位を占め，世運を挽
 回して登極したところ，示威と懷柔は等しく行い，民を慰問し悪人を討伐す
 ることは公平で恣意的なところはないので，登用は貴公の先祖から存在して
 おり，自分で討滅した者（＝突厥の末裔）を残存させたのである．3 世代を経
 たので，（貴公の一族は，）大いに（悪声の梟をも美声で鳴かせたという）桑
 の実を味わって⁽³¹⁾（つまり，寵愛を受けて）恩を感じており，60 年（近く）も
 の長きにわたって，麻を（一緒に）植えて（ヨモギを）まっすぐ生やした（故
 事⁽³²⁾のように，自らを中華の地で教化した）．そのようなわけで，貴公に命じて
 帰義可汗とし，異民族の血統を継承させよう．ああ，覚えておきなさい．貴
 公の威儀を正し，貴公の軍の警戒を強めよ⁽³³⁾．（貴公が）寵愛を受けることを

(28) 『後漢書』卷四七「班梁列伝第三十七 班超伝」（中華書局標点本，p. 1571）．

(29) 『史記』卷五三「蕭相国世家」（中華書局標点本，pp. 2015, 2020）．

(30) 『漢書』卷七三「韋賢伝第四三」（中華書局標点本，p. 3115）．

(31) 『詩経』「頌 魯頌 泂水」（『新釈』，p. 386）．

(32) 『荀子』卷一「勸学篇第一」（『新釈』，p. 21）．

(33) 『詩経』「大雅 蕩之什 抑」（『新釈』，pp. 209-210）．

願うのであれば、(貴公を) 養い安んじることに限りはないだろう。従わないべきか、いや、従うできである。謹んで我が命令を承り、天の御心にそぐえば、その声望は竜庭・鵬海(詳細不明)といった北方の地に知れ渡るであろう。(感徳は) 永昌元(689)年九月に右豹韜衛將軍(職事官, 従三品)を授かった。中書省を警備し、内宮に夜警を行ったので、天子は感徳が重臣であることを知り、感徳の同僚たちは、(感徳を) 国の宝として推挙した。(周の) 聖神皇帝(=則天武后)は、明堂の席に就いて天下に朝政を行い、泰階という星座(に象徴される朝廷)へと登って天下を保有した。地は万物を養育し、(神話の時代に伏羲が受け取ったように、) 河図洛書(という書物や図形)⁽³⁴⁾を出現させた。天は万物形成を司っていて、星も月もますます輝いている。(日の昇るところである) 扶桑は東方に及んでおり、弱木(詳細不明)は西方を取り囲んでおり、火微(詳細不明)は南方にあり、氷洲(詳細不明)は北方にある。(それらの国々は) 悉く周の曆を頒布されており、みな(周の) 版図に入ったのである。(その中でも、感徳の突厥は、) さらに(高官に) 奨められる榮譽を受け、再び恩沢ある制勅を下賜された。天授元(690)年九月二十九日に制勅を下されて言うには、次のようであった。「(突厥は) 代々、異民族の部落に雄壮であったが、早くから皇帝の教化を慕っているため、その名譽は金河で重用され、その評判は(西域を象徴する) 玉門関で高い。おりしも、(我が) 大周が建国し、(中華の) 皇運は改まった。天の授けた恩寵を推し広め、ともに栄光の一端を享受するがよい。(貴公を) 冠軍大將軍(武散官, 正三品)・行右鷹揚衛大將軍(職事官, 正三品)とする」。(叔母に衛皇后がいる) 前漢の外戚(である霍去病)は、初めて冠軍侯となる恩寵があり⁽³⁵⁾、晋(実は三国魏)の名臣である曹洪は、初めて鷹揚校尉に選任された⁽³⁶⁾(という来歴からわかるように、感徳は重職に就いたのである)。(天空では、星団である) 羽林軍の上将(である星々)が、光を畢宿と昴宿の間で輝かせ、(地上では、) 儀仗警衛の勇猛な將軍たちが、軍団を皇帝のもとで輔佐している。(感徳の) 寿命は永続せず、善行を行って

(34) 『易経』「繫辭上傳」(『新釈』, pp. 1540-1541)。

(35) 『史記』卷一一一「衛將軍驃騎列伝」(中華書局標点本, p. 2928)。

(36) 『三国志』卷九「魏書 諸夏侯曹伝」(中華書局標点本, pp. 277-278)。

たにもかかわらず、その甲斐もなかった。ああ、悲しいことである。天授二(691)年正月(=十一月)十八日に、洛陽從政里の自宅で病没した。享年 27 であった。(春秋齊の宰相である)管仲が亡くなると、齊の桓公は(政務を)愉快に思わなくなり、⁽³⁷⁾(弟子の)顔回が夭逝してしまったために、孔子は長い嘆息をもらした。⁽³⁸⁾(感徳も両者と同様に惜しまれつつ逝去した。感徳が死ぬと)道行く人は悲しみ、(近隣で不幸があった場合の礼に基づいて、)白で米をついている人は米つき歌を歌わなかった。⁽³⁹⁾黄泉の国に(感徳の)いるべき場所など無いのではあるが、百人の命と引き替えにしても(感徳の死を)贖うことなどできないのである。

可汗感徳は、その容貌は卓越しており、眉と目つきは秀麗であった。礼儀をもって他人と交流し、物に執着しなかった。(楚丘の宮殿に植えられた)イイギリ・キリ・キササゲ・ウルシといった木々⁽⁴⁰⁾(に比される才人たちは)、君子の林で繁茂(するかのよう、才能を開花)し、宝玉や珍奇な貝殻(に比される才人たちは)、賢人の部屋で輝きを放つ(?)のである。(感徳もそうした才人の 1 人であった。感徳は)常に歴史を学ぶことを好んだので、そのため、(西晋の学者であった)⁽⁴¹⁾束皙は(感徳と冥界にて)靈魂となって交流を持ち、(その)名誉は当時において重んじられたので、(前漢の学者であった長沙王の太傅)⁽⁴²⁾賈誼は当然、靈魂となって通行を結ぶであろう。春に花々が咲き乱れ、都の大路に靄が立つごとに、(唐の長安にあった)曲江池に出かけていっては詩を作り、そびえ立つ山に向かっては賞賛した。財物を軽視して、施与を重視し、義(の心で物)を売り、仁(の心で物)を買った。雨が家屋を壊し、(家屋が)崩れたとしても、決して隣家の婦人を(自宅に)受け

(37) 『史記』卷三二「齊太公世家第二」(中華書局標点本, pp. 1485-1493)。

(38) 『史記』卷六七「仲尼弟子列伝第七」(中華書局標点本, p. 2188)。

(39) 『礼記』「曲礼上」(『新釈』, pp. 43-44)。

(40) 『詩経』「国風 鄘風 定之方中」(『新釈』, pp. 140-143)。

(41) 『晋書』卷五一(中華書局標点本, pp. 1427-1434)。

(42) 『史記』卷八四「屈原賈生列伝第二四」(中華書局標点本, pp. 2491-2503)。

入れない⁽⁴³⁾(という礼節をわきまえている)とはいえ、困窮して食糧が尽きたとしても、確実に旅人を見捨てない(という義の心を持っていた)。(北方の)狼山に逃れるのではなく、確かに(前漢代における匈奴の呼韓邪单于のように、)麒麟閣に肖像を描かれた⁽⁴⁴⁾(=朝廷で重んじられた)。そこで、制勅があつて、七品官1人に墓域を警備させ、必要となる物資は皆お上から提供させた。墳墓は馬のたてがみのよう(に盛り上がり)、参道は羊の腸に似て(長く曲がりくねって)おり、万代に渡って高くそばだち、長久の時間(存在するの)である。

夫人の阿史徳氏は鎮軍大將軍(武散官、従三品)・行右武衛大將軍(職事官、正三品)兼定襄都督・五州諸軍事・右羽林軍上下・五原郡開国公(爵位、正二品)の次女である。(月の女神である)嫦娥は彼女のたましいを援助し、(婺女星の女神である)宝婺は、彼女の英知に宿っている。もともと、孟子の母が(息子の教育環境のために、)3回家移りした⁽⁴⁵⁾という(賢母の)気風が家系にあり、(春秋の)楚の妃が笑つ(て夫の莊王を諫め)⁽⁴⁶⁾たという(内助の功の)規範となるべき礼節を以前から慕っている。どうして、ただ(晋の陳氏の作った詩文である「椒花頌」⁽⁴⁷⁾のように、)山椒の花が頌となり、(後漢の謝道韞が柳絮の詩文を作ったように、)⁽⁴⁸⁾柳の綿毛が文章を飛ばすだけであろうか、とうとう(慈愛と聡明にあふれた春秋衛の定公夫人)姜氏⁽⁴⁹⁾の賢明さ(に比す評判)を聞くこととなり、そして(春秋)曹の(釐負羈の)妻が夫を戒めた(という聡明な女性を表す)⁽⁵⁰⁾故事を體現した。(『詩経』にある)「鵲巢」⁽⁵¹⁾(の詩)が朗詠され(そ

(43) 『詩経』「小雅 節南山之什 巷伯」の「哆たり侈たり、是の南箕を成す(哆兮侈兮、成是南箕)」に附された「毛伝」(『十三經注疏』卷一二之三(中文出版社版、p. 978))。

(44) 『漢書』卷五四「李広蘇建伝第二四」(中華書局標点本、p. 2468)。

(45) 『列女伝』卷一「母儀伝 鄒孟軻母」(『新編』、p. 181)。

(46) 『列女伝』卷二「賢明伝 楚莊樊姫」(『新編』、pp. 244-246)。

(47) 『晋書』「列女伝 劉臻妻陳氏条」(中華書局標点本、p. 2517)。

(48) 『世説新語』「言語第二」(『新釈』、p. 166)。

(49) 『列女伝』卷一「母儀伝 衛姑定姜」(『新編』、pp. 134-136)。

(50) 『列女伝』卷三「仁智伝 曹釐氏妻」(『新編』、pp. 333-334)。

(51) 『詩経』「国風 召南 鵲巢」の序(『新釈』、p. 42)。

の中で女性の徳行を述べると), (それは) すべて阿史徳夫人の (徳行を表す) 詩となり, (『詩経』にある) 「鷄鳴」 (の詩)⁽⁵²⁾ が歌唱され (女性の内助の功を述べると), まさに現在の婦人 (= 阿史徳夫人) の徳が (その歌には) ある。天下に匹敵する者は少なく, 全国に並ぶ者がいない。 (情愛の深い女性である西晋の) 賈充の娘 (のような阿史徳夫人)⁽⁵³⁾ は夫を亡くし, (春秋楚の) 昭王夫人の貞淑な姜氏 (のような阿史徳夫人)⁽⁵⁴⁾ には子がいなかったのて, 日々の歳月を嘆き暮らし, 長い時間を苦勞して (過ごして) いた。 (夫人が) 宗廟祭祀を司り, むなしく励んだのであるが, とうとうその先見の言動は絶えてしまった (= 死んだ)。雲の中を飛んでいる配偶者を失った鶴から, 何度か傷心の鳴き声を聞き, 鏡が (鬪賓王に捉えられた) 孤独な鳳凰に覆い被さる (ようにその姿を映し出す) と, (鳳凰は) ひとり傷心の涙をこぼした⁽⁵⁵⁾。天授三 (692) 年一月三十日に神都城 (= 洛陽城) 南方の畢圭郷に棺を葬るという礼になかった葬送である。 (その墓域は, 洛陽近郊にある) 轅轅山⁽⁵⁶⁾ を背にして (洛水の雅称である) 温洛を正面にし, 皇宮を前方に, (石窟寺院のある) 竜門を後方に見ている。大路は直線であり, 城内は曲がりくねり, 胡笳はむせび泣くような音色を響かせてさらに続いていく。風の音は悲しみつつ奮い立ち, 小さく響く太鼓の音はその (風の音の) 戒めの声に紛れ込んでしまっている。 (前漢の) 夏侯嬰の墓域に馬が足を上げて (動かなくなり, その石槨に「三千年にして白日を見る」と書かれていたように), 夫妻の墓域を目にする者は何年後に現れるであろうか。 (漢代の) 丁令威が鶴となって鳴き (1000 年後に故郷に帰ったように), 夫婦の声を聞く者は一体何歳となるのだろうか。そこで, 次のような銘を作った。

(遊牧民の地である) 竜城は北方に栄えており, 鵲壑 (不明) は南方に通じ

(52) 『詩経』 「国風 齊風 雞鳴」 の序 (『新釈』, p. 251)。

(53) 『晋書』 卷四〇 「賈充伝 附賈謐伝」 (中華書局標点本, pp. 1172-1173)。

(54) 『列女伝』 卷四 「貞順伝 楚召貞姜」 (『新編』, pp. 469-473)。

(55) 『藝文類聚』 卷九〇 「鳥部上 鸞」 (上海古籍出版社版, p. 1560)。

(56) 『元和郡県図志』 卷五 「河南道一 河南府条」 (中華書局標点本, p. 133)。

(57) 『西京雜記』 (中華書局標点本, p. 25)。

(58) 『搜神後記』 卷一 (『叢書集成初編』 [2695], p. 13)。

ている。(その)地は荒野に属し、(そこに住む)人は豪傑で満ちている。(その地には、匈奴)单于の(時代からの)旧来の習俗があり、老上单于が遺した気風がある。(そこに住む人々の)英雄の武勲は古くから振るっており、盛んな功業は極めて興隆している。第1の銘である。臣下は(仕えるべき)主を待つことを考え、鳥は(やどるべき)木を選ぶことを思うものである。鶴が鳴きながら沢にいた(としたら、姿が見えなくても存在が目立つ⁽⁵⁹⁾ように、遊牧の民は、在野にいても評判が響き渡っていた)し、雁が雲中を飛んだ(ように彼らは飛躍した)。天に寵愛を受けた者は(後漢に降った南匈奴の王である)日逐王⁽⁶⁰⁾という名である。(それと同様に遊牧民たちは、)皇室に恭順の態度をしめし、荣誉を承り、代々禄を食んだ。第2の銘である。唐が天下を統治すると、(感徳の先祖は)まさしく武職を担当した。(唐に対して)玉冊が降ると、(感徳の先祖は)宮城にて輔佐を行った。(春秋晋から戎に降った)由余は(戎から秦に降り)宰相となり⁽⁶¹⁾、金日磾は(漢の武帝という)主人に仕えた。古来より同じく天子の教化を受けてきたので、そこで、(感徳は)任用するに値したのである。第3の銘である。(可汗の)賢良な臣下は跡継ぎが絶え、友邦は滅亡した。興隆することはないのか、その国はどのようにしたら栄えさせられるのであろうか。ここに、その末裔に命令を下し、貴公(感徳)に(匈奴の王の称号である)賢王を継承させた。『六韜』・『三略』といった兵書を参照し、(その書を)手本として朝廷を守備せよ。〔第4の銘である。〕(黄帝の孫とされる高陽氏顓頊の八子(八愷)の1人である)蒼舒⁽⁶²⁾は子供の頃から有能であったが、顔回は夭逝した。(同様に感徳も夭逝した。)地に(感徳夫妻の)孤立した墳墓をたて、人々は簡素な葬儀を行った。山々は北にそびえ、松を植えた門は西方にある。死してもなお知覚があり、(その魂は)葬礼が終わっても退かなかった。第5の銘である。冥界では永い時間が過ぎ(?), 墓地に生える樹木は春をむなしく迎える。この(墓)地を知らないで、かつて

(59)『詩経』「小雅 鴻雁之什 鶴鳴」(『新釈』, p. 269).

(60)『後漢書』卷八九「南匈奴列伝」(中華書局標点本, pp. 2939-2942).

(61)『史記』卷五「秦本紀」(中華書局標点本, pp. 192-194).

(62)『春秋左氏伝』「文公十八年」(『新釈』, p. 557).

何人をこの地に留めたであろう。山には残雪があり、行路は砂埃で暗い。ああ、君子よ、誠実な婦人を惜しみ給え。〔第6の銘である。〕

3. 阿史那感德墓誌の歴史的意義

(1) 阿史德氏との婚姻について

唐は第一可汗国を滅ぼすと、10万とも称される⁽⁶³⁾膨大な突厥遺民を受け入れて国内に多数の羈縻州を設置した。さらに、突厥の支配者層には官称号を与え突厥遺民の統治を行わせた。彼らは突厥騎馬軍団を率いて、太宗期から高宗期にかけて起こった様々な戦役で活躍しており、処羅可汗の子である阿史那社爾や、執失部の首領であった執失思力など、『両唐書』に立伝されたものすらいて⁽⁶⁴⁾、唐前半期に多大な軍事力を提供したことが知られている。突厥遺民の事跡は第二世代以降になるとほとんど漢籍中に現れなくなるが、突厥羈縻州自体はそれ以降も存続している。本墓誌の主人公阿史那感德は、まさに漢籍中に事跡が現れない第二世代以降の突厥遺民であり、頡利可汗の曾孫であった。墓誌の10行目に「是れ一日千里にして、北より南に^ゆぎ、四代に五公、子を生めば父に及ぶを知る」とあることからわかるように、彼の一族は頡利可汗の帰順以来、代々唐の国内で官職を得て生活していたが、祖父の特勤、父の伽那ともに、漢籍史料には一切現れない。

さて、墓誌の33-34行目には、彼の妻は阿史德氏の出身であり、「鎮軍大將軍・行右武衛大將軍兼定襄都督・五州諸軍事・右羽林軍上下・五原郡開國公の第二女」とあった。その父親は次の史料より比定されている〔趙2009, p.480〕。

（顯慶）五（660）年，定襄都督阿史德枢賓・左武候將軍延陀梯真・居延州都督李含珠を以て冷陁道行軍總管と為す〔『新唐書』卷二一九「北狄伝

(63) 『唐会要』卷七三「安北都護府条」（上海古籍出版社，p.1556）に見える秘書監魏徵の言に、「降りたる者は幾んど十万に至る（降者幾至十萬）」とある。

(64) 阿史那社爾は『旧唐書』卷一〇九（中華書局標点本，pp.3288-3290），『新唐書』卷一一〇（中華書局標点本，pp.4114-4116）に、執失思力は『新唐書』卷一一〇（中華書局標点本，pp.4116-4117）に立伝されている。

奚条」(中華書局標点本, p. 6174)⁽⁶⁵⁾】.

ここに現れる阿史德枢賓が、定襄都督という同じ役職を帯びている点と、同時代人である点から彼女の父親と考えられており、筆者もこれに従う。

先行研究では全く指摘されていないが、感徳の妻が阿史德氏であったことは歴史上大きな意味を持つ。護雅夫氏によれば[護 1967, pp. 11-13], 漢籍史料中に阿史德元珍としても現れる第二可汗国の武人宰相トニユクク Toñuquq⁽⁶⁶⁾が、第二可汗国第3代の毗伽可汗 Bilgä Qaγan に娘を嫁がせていたこと[『旧唐書』卷一九四上「突厥伝上」(中華書局標点本, p. 5173)]から、阿史德氏は阿史那氏の姻族集団であり、皇后に当たる可敦 qatun が輩出する氏族であったという。護氏は、匈奴において呼衍氏などが姻族集団であった例を引き、同様の習慣が突厥にも存在していたと論じたのである。

しかし、護氏が挙げ得た例は第二可汗国のわずか一例であり、果たして阿史德氏が第一可汗国の時代から既に姻族集団として機能していたかどうか、確証はなかった。ところが、本墓誌には可汗王家である阿史那氏のなかでも、正統な可汗の子孫である感徳と阿史德氏との婚姻が述べられている。羈縻支配時代の末期に属す感徳の時代にこの婚姻形態が存在していたということは、羈縻支配時代を通じて阿史德氏が阿史那氏の姻族集団だったことを示している。さらに言えば、このような姻族集団の成立が唐支配時代のことであるとすると不自然であるため、第一可汗国の時代から阿史德氏は姻族集団であったと考えられる。それゆえ、阿史德氏が第一可汗国から第二可汗国まで通じて阿史那氏の姻族集団であったことが、改めて証明されたと言ってよかろう。

ところで、突厥羈縻州において唐が作った序列は、最高統治機関として唐中央派遣の漢人を長とする单于大都護府を置き、その下に突厥遺民の自治機

(65) (顯慶)五年，以定襄都督阿史德樞賓・左武候將軍延陀梯眞・居延州都督李含珠爲冷陁道行軍總管。

(66) 阿史德元珍とトニユククとを同一人物と見なす説はヒルト氏によって初めて唱えられ[Hirth 1899, pp. 9-16], クリヤシュトルヌイ・護両氏[Кляшторный 1964, pp. 29-31; 護 1992]によって補強されているが、反論もある[岩佐 1936, pp. 148-149, n. 46; Liu 1958, pp. 594-597; 羅 2009]。筆者は同一人物説に従っている。

関として左右廂を置いて、当初は左廂に定襄都督府を、右廂に雲中都督府を置き、さらに各都督府の下に各氏族に対応する州を置くというものであった。⁽⁶⁷⁾

そのうち、定襄都督に任命されていたのが阿史德氏であったことは、上で引いた感徳の義父である阿史德枢賓の例で判明する〔岩佐 1936, pp. 86, 88-89〕。都督に阿史那氏が任命されなかったことは、阿史那氏に権力を渡さないための唐の政策とされている〔岩佐 1936, p. 89〕が、それにしても阿史德氏が自治機関の長に選ばれたのは、第一可汗国時代から権勢があったためだろう。実際に頡利可汗の時代には、唐に使者として派遣されて拘束された人物として阿史德氏が登場している〔『旧唐書』卷一九四上「突厥上」(中華書局標本, p. 5155)〕。第一可汗国時代で漢籍中に名が残っている氏族は、阿史那氏を除けば執失氏と阿史德氏しか存在しないことから、その重要性が窺い知られるのである。唐は第一可汗国において強勢であり、姻族集団でもあった阿史德氏を利用して突厥羈縻州を支配したと考えられる。

しかし、第二可汗国が復興した際には、阿史德氏は阿史那氏を擁立して可汗に立てている。突厥遺民は 679 (調露元) 年、680 (永隆元) 年における二度の反乱失敗を経て、682 (永淳元) 年に阿史那氏の骨咄祿 Qutluγ がついに唐の支配を脱し、突厥第二可汗国を建国した。その際、679 年と 680 年との反乱で阿史德氏が阿史那氏を可汗に立てて反乱を起こしており、都督として勢力を維持した阿史德氏が、可汗が輩出する氏族である阿史那氏を擁立したと解釈されている〔護 1967, pp. 231-233〕。つまり、羈縻支配時代においては、阿史那氏は権力は持たないものの象徴的な権威を変わらず帯びている一方で、阿史德氏は唐から与えられた権力を保持するものの、王族である阿史那氏が有する権威を帯びることはできなかった。それゆえ、唐は定襄都督であった阿史德氏に権力だけでなく権威を付与するために、頡利可汗の直系子孫と阿史德氏との通婚関係を続けさせ、姻族集団としての立場を維持させ続けていたのではなかろうか。羈縻州支配の体制は、第一可汗国時代と同じく、阿史

(67) 岩佐 1936, pp. 88-90 ; 石見 1987, pp. 123-127. 後には左廂に桑乾都督府を、右廂に呼延都督府を増置して 4 都督府体制となった〔石見 1987, pp. 125-126〕。

那氏と阿史德氏の姻戚関係によって支えられていたと推測されるのである。⁽⁶⁸⁾

(2) 帰義可汗擁立の背景

阿史那感徳は、墓誌の18行目の記述に拠れば、突厥第一可汗国滅亡後60年近くが経過した687(垂拱三)年に、なぜか「帰義可汗」に擁立されている。しかし、この擁立の背景について本墓誌を検討した先行研究では何も論じられておらず、⁽⁶⁹⁾不明なまま残されているのである。

確かに従来も、唐国内で生活していた可汗直系の阿史那氏の存在が比較的多く知られていることは上述の通りである。にもかかわらず、現在までに可汗になったことが知られているのは、唐から「乙弥泥熟俟利苾可汗」に擁立された[『通典』「突厥上」, p. 5415] 阿史那思摩しかない。

しかし、思摩の擁立は、639(貞観十三)年に、当時唐の朝廷内で処遇が問題となっていた突厥遺民たちを黄河以北に移住させるためという明確な目的のもとで行われた。⁽⁷⁰⁾ しかも彼は、突厥に代わって漠北の覇権を握っていた薛延陀可汗国の圧迫を受けて643(貞観十七)年に可汗から退位し、それ以降、唐は突厥に可汗を置かずに都護府・都督府を用いて羈縻州支配を行うこととなるのである。それゆえ、思摩退位から40年以上経た段階で感徳が可汗に擁立されたことも、思摩擁立と同様、何かしら明確な意図があったと考えるべきである。

この点を考察するためには、当時の時代状況を考えなければなるまい。既に触れたように、当時は679年、680年における二度の反乱失敗を経て、682

(68) 唐に降った突厥王族には、宗室からの公主(忠・摸末)や、漢人の趙氏(施)を妻としている例もあるため、阿史那氏と阿史德氏との婚姻はかなり狭い範囲に限定されていたようである。筆者は頡利可汗直系子孫に限られるのではないかと推測しているが、より詳しい検討は今後の課題である。

(69) 朱2010a, p. 200では、感徳の授官は、則天武后が国内の支持を得るために大量の授官を行った流れに連なると指摘しているが、可汗位擁立の理由は論じられていない。

(70) この時の突厥遺民の移住は、王族の阿史那結社率によって起こされた太宗暗殺未遂事件である「九成宮事件」をきっかけとして行われた[岩佐1936, p. 84; 石見1987, pp. 121-122; 朱2010b, pp. 174-178].

年について阿史那骨咄祿 Qutluy が唐の支配を脱して突厥第二可汗国を建てた直後に当たる⁽⁷¹⁾。岩佐精一郎氏によれば [岩佐 1936, pp. 100-106], 突厥はまず 682 年に雲州を陥落させ、同年に唐の羈縻州にいた阿史德元珍を迎え入れて阿波達干 apa tarqan に任命し、軍を指揮させている。続いて、683 (弘道元) 年三月には、突厥羈縻州を統治するための最高機関である单于大都護府を陥落させ [cf. 齊藤 2009, p. 3], 東は定州、西は豊州に及ぶ広域を攻撃している。さらにその後も、684 (文明元) 年七月には朔州、685 (垂拱元) 年には代州、686 (同二) 年には両井 (所在地不明)、687 (同三) 年には二月に昌平、八月に朔州⁽⁷²⁾ と、683 年ほどの規模ではないにしろ、連年漠南にある唐の拠点を攻撃している。しかし、突厥はその後、漠北のオテュケン Ötüken 山攻略に鋒先を変えたため漠南における攻撃は止んだという⁽⁷³⁾。

感徳の可汗擁立が行われたのは、まさにこのような唐と突厥との連年の戦闘のさなかのことであり、しかも、唐が劣勢に立たされる中であった。それ故、感徳の擁立と第二可汗国の建国とは、関係があると考えて間違いなからう。

その関係を探るに当たって鍵となるのが、鈴木宏節氏によって提唱された「ブミン正統原理」という考え方 [鈴木 2008a, pp. 147-145] である。これはすなわち、第一可汗国の時代に突厥創始者であるブミン可汗の直系子弟でなければ可汗となれなかったという原則のことである。鈴木氏は、この原則が

(71) なぜ突厥が唐の支配を脱することができたのか、先行研究においては次の 3 つの視点に大別される。①高宗～武后期の唐国内の混乱に求める説 [岩佐 1936, p. 106; 金子 2003, p. 17]。②吐蕃の東方進出により唐の戦力が西方に向けられたことに求める説 [孟 1995, p. 252; 李 2000, p. 70]。③突厥遺民の反乱に関しては吐蕃の進出に、突厥の独立成功に関しては唐の国内情勢に求める説 [菅沼／菅沼 2009, p. 10] である。

(72) 岩佐氏は七月のこととしている [岩佐 1936, p. 136] が、呉玉貴氏の編年 [呉 2009, pp. 541-543] に従い、八月とする。

(73) 岩佐 1936, pp. 130-132. 岩佐氏は、突厥が漠北を経略したために陰山を引き払ったと述べているが、氏自身も認めている通り [岩佐 1936, pp. 115-116], 骨咄祿を継いだ默啜 (= Qapγan Qayan) の時代に、「黒沙南庭」と呼ばれる拠点が陰山周辺に存在している。「黒沙城」という地名は、骨咄祿が 682 年に反乱を起こした際にも拠点として登場しており [『旧唐書』巻五「高宗紀」(中華書局標点本, p. 110)], この地を骨咄祿が放棄したことはありえない。主力は漠北に向けたにせよ、漠南が変わらず突厥の領域であったことは間違いない。

第二可汗国の時代にも引き継がれたと考え、次の史料に着目した。

骨咄祿は、頡利の疎属なり。其の父は本と是れ單于の右廂の雲中都督 舍利元英^{トドン=チヨル}下⁽⁷⁴⁾の首領にして、代⁽⁷⁴⁾よ吐屯⁽⁷⁴⁾噉を襲う『通典』卷一九八「辺防十四突厥中」(中華書局標点本, p. 5434)】。

ここでは、骨咄祿の血縁が「頡利の疎属」とされており、骨咄祿が頡利可汗の直系ではないことが明言されているのである。さらに、鈴木氏は732(開元二十)年に骨咄祿の息子である毗伽可汗が建造したキョル＝テギン碑文において、唐から贈られた玄宗御製の漢文を備えた西面に記された骨咄祿の父祖の名が、祖父は「伊地米施匐 Etmış Bäg」、父は「骨咄祿頡斤 Qutluğ Irkin」とあることから、骨咄祿の家系はせいぜい部族長クラスの称号しか帯びることができない傍系出身であり、可汗になる資格があるブミン可汗の直系子弟の系統にあったとは考えられないと論じた。

それにも関わらず、キョル＝テギン碑文東面(1-5行目)⁽⁷⁵⁾には、ブミン可汗が骨咄祿の「宗祖(äčüm apam)」であることが明記されているうえ、第一可汗国の歴史に続けて第二可汗国の建国を述べていて、さも骨咄祿がブミン可汗の血統に直結しているかのような印象を与えている。しかし、他の史料の記述に照らせば、これは虚構なのである。

鈴木氏は、このような虚構が記された理由として、骨咄祿の血統が「ブミン正統原理」から逸脱したものであったため、それを覆い隠し自らの正統性を主張するためであったと述べている[鈴木2008a, p. 146]。

このように、「ブミン正統原理」は突厥の民に共有される感覚だったのであり、それは羈縻州における反乱の時期においても同様であった。というのも、二回目の反乱の際に可汗となった阿史那伏念には、次のような記録があるからである。

永(崇)[隆]元(680)年、突厥は又た頡利の従兄の子の阿史那伏念を夏州に迎え、將に河を渡りて立てて可汗と為さんとするに、諸部落は復た

(74) 骨咄祿者、頡利之疎屬。其父本是單于右廂雲中都督舍利元英下首領，代襲吐屯噉。

(75) 当該箇所テキスト及び和訳は、鈴木2008a, pp. 156-152を参照のこと。

響応して之れに従う。『通典』卷一九八「辺防一四 突厥中」（中華書局標点本，p.5433）⁽⁷⁶⁾】。

ここで、伏念が頡利可汗の従兄弟の子であったことが述べられているのである。曾孫がいる時代に頡利の従兄弟の子が生きているのかはなほ疑問ではあるが、いずれにせよ、反乱を起こした突厥は「ブミン正統原理」のつとり、頡利可汗の近親者を選んで可汗に据えたと考えられよう [cf. 護 1967, pp. 232-233]。しかし、この伏念の反乱は失敗し、次に、正統性のない骨咄祿の反乱が成功する。

骨咄祿の攻撃によって 683 年に単于大都護府が陥落すると、唐が通常の羈縻政策によって突厥遺民を統治することは不可能となった。しかも、その後の戦闘でも唐側に不利な状況が続いており、武力で突厥の反乱を鎮圧することにも失敗してかなり追い込まれた状況だったものと推測される。そのために、窮余の策として実現したのが阿史那感徳の可汗擁立であったと考えられる。感徳は「ブミン正統原理」に基づき羈縻支配体制が崩壊した突厥羈縻州において、遺民を統御してこれ以上第二可汗国へ遺民が流出することを防ぐため、唐から擁立された傀儡可汗であった。それは、実態はどうであったにせよ、名目的には正統な「突厥第一可汗国」の復活を意味しており、正統性のない可汗が治める第二可汗国と対決することが期待されたと考えられる。一切漢籍史料中に記述が残されてはいないものの、唐は第二可汗国の建国によって崩壊した羈縻州を立て直して、反乱軍たる第二可汗国を打倒するための処置を、同じ羈縻州のなかで最も権威のある頡利可汗の子孫に委ねて行おうとしたのである。⁽⁷⁷⁾

唐が、従来の支配者の直系を傀儡に据えて、新興勢力を押さえようとした

(76) 永崇元年，突厥又迎頡利從兄之子阿史那伏念於夏州，將渡河立爲可汗，諸部落復響應從之。

(77) 鈴木宏節氏によれば、第二可汗国側が突厥碑文中において「ブミン正統原理」を強く意識することとなった背景には、感徳ら第一可汗国の正統な子孫が生存していたことが関係しているという [鈴木 2008a, p. 146]。毗伽可汗の時代まで正統性をめぐる争いが続いていたとすれば興味深い。

事例は、ほぼ同時代に天山山脈を本拠地とした、もとは突厥第一可汗国と祖を同じくする西突厥の場合にも見出すことができる〔内藤 1988, pp. 261-304〕。唐は滅亡後の旧西突厥領を可汗直系の人物に可汗号を付与した上で統治させていた。しかし、勃興してきた西突厥配下の一部族である突騎施 Türgiṣh によって、703（長安三）年に濠池都護・繼往絶可汗に擁立されていた阿史那斛瑟羅が唐に亡命したことにより、唐の統治は崩壊する。そこで唐は斛瑟羅の息子であり、ともに入朝していた懷道を、旧西突厥諸部を統括させ突騎施に対抗するために十姓可汗に擁立して碎葉 Süyāb（現キルギス共和国アクベシム遺跡⁽⁷⁸⁾）の牙庭に派遣したのである〔松田 1970, p. 372；内藤 1988, pp. 77-81〕。この阿史那懷道の例は、地域は違うものの血統上の権威を有した可汗が派遣されるという構図が感徳の事例とよく似ている。阿史那感徳の擁立が、正統王家の末裔を擁立して新興勢力と対峙させるという唐の政策の先駆となった可能性がある。

擁立された感徳が、どの程度突厥遺民を統御することができたのか、史料の不足により残念ながら不明であるが、おそらく第二可汗国との大規模な衝突は発生しなかったものと思われる。なぜなら、既に述べたようにちょうど感徳が擁立された頃を境として第二可汗国は漠南から漠北へと侵攻対象を転換しており、漠南へ侵攻しなくなっているからである。第二可汗国が漠北侵攻に踏み切った理由として、トニユクク第一碑文南面（1-8 行目）⁽⁷⁹⁾には、東方の契丹、南方の唐、北方の九姓鉄勒（トクズ＝オグズ）が三方から突厥を攻撃しようとしているため、先んじて漠北の九姓鉄勒を討ったことが述べられ

(78) アクベシム遺跡が碎葉城であったことは、現地出土漢語碑文を検討した内藤 1997 によって証明された。

(79) トニユクク碑文の研究史については、鈴木 2003 を参照のこと。なお、1996～1998 年に行われた日蒙合同調査の際に将来された最新の拓本が、大阪大学に所蔵されており、インターネット上でも閲覧可能である（「大阪大学総合学術博物館」ホームページ中の「大阪大学総合学術博物館統合資料データベース」（<https://www.museum.osaka-u.ac.jp/database/>）内にある「モンゴル国現存遺蹟・碑文調査（ビチェース・プロジェクト）」の項）。阪大所蔵拓を利用した研究としては鈴木 2008b があり、トニユクク碑文の当該箇所も大部分引用している。

ている。さらには、内藤みどり氏によれば [内藤 1988, pp.313-314], 687 (垂拱三) 年か 688 (同四) 年から 690 (天授元) 年にかけて、骨咄祿は西突厥侵攻に兵力を向けたとされ、やはり漠南は侵攻対象ではない。一方の唐側も、勃興してきた西方の吐蕃との戦闘に戦力を割かれており [cf. 菅沼／菅沼 2009, pp. 11-13], 感徳を援助して強いて漠南を制圧することはできなかったであろう。このような漠南の静けさの中、可汗になってわずか 4 年後の 691 (天授二) 年に感徳は 27 才の若さで病没したのである。

感徳が病死し、しかも墓誌の 36 行目に「貞姜 子無ければ」とあるように彼に子がなかったため、唐はその方針を転換して第二可汗国を新たな突厥国家として承認することとしたようだ。骨咄祿の死後、跡を継いだ默啜 (= カブガン可汗 Qapγan Qaγan) は、695 (天冊万歳元) 年に唐に遣使したため、則天武后は彼に左衛大將軍を授け、さらに翌年には唐から使者を派遣して默啜を「遷善可汗」に冊立している。さらに 697 (万歳通天二) 年には「特進・頡跌利施 (Elteriš) 大单于・立功報国可汗」に冊立しようとしたが、これは默啜の侵攻により実現しなかった⁽⁸⁰⁾。このように、唐は傀儡可汗による統御を諦めて第二可汗国を突厥政権として承認し、可汗に冊立したうえで対応することになったのである。

本章の検討から、阿史那感徳は阿史徳氏との婚姻という第一可汗国以来の慣習を守っていたことが判明した。これは、羈縻州支配における阿史徳氏の権威を保証するためと考えられる。さらに、第二可汗国が建国されると「ブミン正統原理」に基づき、突厥遺民の統御を目的として唐から傀儡可汗に擁立された。唐が突厥遺民を受け入れて 60 年を経過してもなお、その統御には第一可汗国の正統性が必要だったのである。突厥羈縻州は唐の国内でありながら旧来の突厥第一可汗国で用いられていた通念が残る領域であったと言える。突厥羈縻州はあくまで突厥の世界だったのである。

なお、大きな問題として、唐から官職を与えられて都で死去している王族たちが、根拠地の羈縻州とどのように関係したかという問題がある。この点、

(80) 以上、默啜の授官・冊立の編年に関しては、護 1967, p. 188 によった。

本墓誌でも 8-9 行目や 20 行目、43 行目に侍衛として兵権を司ったと取れる文面がある。しかし、中央に集められた王族と根拠地の集団とが具体的にどのような関係を結んでいたかについては史料が少なく、全体像を描く作業は今後の課題である。また、羈縻州体制は唐の官僚制による指揮・命令系統が被支配部族の内部に入り込んでいる点を特徴とすると説明されている [堀 1998, p. 66] が、王族たちが官僚制の中にどのような形で関わっていたのか不明のままである。特に、羈縻州統治の中核に参加できなかった阿史那氏と参加していた阿史德氏との関係が羈縻州体制の中でいかに結びつくか、今回判明した婚姻の問題も含めて今後の課題としたい。

4. おわりに

本稿では、漢籍中からは一切その存在を知られていない突厥第一可汗国最後の可汗、頡利可汗の曾孫・阿史那感徳の墓誌について取り上げ考察した。その結果、次のような諸点が判明した。阿史那感徳は、定襄都督・阿史德枢賓の娘を妻としていたが、これは阿史德氏が阿史那氏の姻族集団であるとした護雅夫氏の説を補強し、第一可汗国・羈縻支配時代を通じて阿史德氏が姻族集団となっていたことを示唆する貴重な実例である。

また、感徳は「ブミン正統原理」に基づいて唐の傀儡可汗である「帰義可汗」に擁立され、羈縻支配体制の崩壊した突厥羈縻州において遺民統御を行うことが期待されていたと考えられる。同様の例として、突騎施に対抗して可汗に擁立された西突厥の阿史那懷道がいる。

従来からも、唐の突厥遺民支配は遊牧民固有の左右翼体制の維持や、氏族ごとに編成された州など、突厥固有の体制を維持していたと論じられてきた [石見 1987, pp. 123-135]。さらに今回の検討では、姻族集団の存在やブミン正統原理までが維持されており、唐の支配下とはいえ突厥固有の社会秩序が強固に維持されていたことが判明した。

第一可汗国滅亡以来、唐は膨大な数の突厥遺民を統御する必要に迫られた。彼らを統御するに当たり、なるべく突厥遺民の自治に任せ、なおかつ反乱勢

力を生み出さないようにするための装置を作り上げる必要があったはずである。そのために阿史那氏が羈縻州の支配体制から遠ざけられたことは既に述べた通りであるが、これは言うてみれば阿史那氏を権力から遠ざけた上で、第一可汗国そのものを保存した状態であった。第一可汗国の社会をそのまま維持した状態で服属させたからこそ、唐は多くの突厥遺民を統御することが可能だったと思われる。しかし、それゆえにひとたび統御を離れれば、突厥国家が復活することは極めてたやすい体制だったと考えられる。第二可汗国が瞬く間にモンゴリアを席卷する大勢力となりえたのは、その基盤がそのまま存在していたからだろう。

ところで、この突厥羈縻州が置かれた陰山以南は、農耕民と遊牧民が混在して生活している境界地帯であり、近年「農牧接壤地帯」などと呼ばれて注目を集めている⁽⁸¹⁾ことは看過されてはならない。鈴木氏は農牧接壤地帯が突厥復興の揺籃の地となったと述べており〔鈴木 2006, p. 25〕、突厥遺民の動向を考える上で重要な指摘である。さらに、第二可汗国が建国されると農牧接壤地帯の状況は大きく変化する。阿史那感徳が統御した復活した第一可汗国の例からもわかるように、第二可汗国に合流しなかった遺民は相変わらず漠南に存在していたが、默啜死後にクーデタが起きた際には多くの突厥の民が唐に亡命してきており〔鈴木 2006, pp. 20-21〕、第二可汗国滅亡時にも亡命者は多かった。これらの第二可汗国の遺民は農牧接壤地帯においてやはり固有の存在として確認されており、チベット語敦煌文書である P.t.1283 を研究した

(81) この地域は、ユーラシア大陸の北緯 40 度付近に広がっており、ユーラシア東部地域においては、長城線の周辺にほぼ一致する〔妹尾 2001, p. 30〕。本地域に対する呼称は様々であり、森安孝夫氏は概説中で「農牧接壤地帯」と呼んでいるが〔森安 2007, pp. 59-62〕、妹尾達彦氏は変遷の後、最新の論考で「農業＝遊牧境界地帯」と呼称している〔妹尾 2009, pp. 113-124〕。石見清裕氏は、ラティモアの論考を再評価し、彼の表現に従って「リザーヴァー」と呼んでいた〔石見 1999〕。この地域は生業の異なる人々が暮らしているだけに富が集積される地域であるとされている〔妹尾 2009, pp. 113-118〕。さらには、この地域に次世代の中国を支配する勢力が蓄積されるという意見もある〔石見 1999, pp. 283-285〕。また、石見氏は最近の論文で、漠南の遊牧民が「農牧接壤地帯」を押さえることによって、北朝から唐前半期までの歴史展開が生まれたとする〔石見 2010, pp. 37-38〕。

森安孝夫氏によれば、760年代後半あるいは770年代に陰山南部からオルドス北部に12の氏族からなる突厥集団（ブグチョル 'Bug-čor 十二姓）が存在していた〔森安1977, pp. 3, 9-10；森安2007, pp. 319, 330-331〕。また、これらの第二可汗国の遺民から、「ソグド系突厥」と呼ばれる集団が現れて安史の乱の主要な勢力となったほか、乱の後に河朔三鎮を構成する勢力となっていき〔森部2010, pp. 89-121〕、一部は代北で沙陀集団と結合して五代諸王朝を築いていく〔森部2010, pp. 183-209〕。

このように、第二可汗国が建国され、さらに崩壊すると、様々な人の動きが起こって以前のように突厥羈縻州を国家規模の巨大な自治集団としては支配できなくなったと考えられる。第一可汗国以来の遺民と第二可汗国を経由して合流した遺民には相違点も多かったと思われるし、さらに新たな勢力へと合流する集団もあった。それゆえ、これ以後は細切れの小集団に対して個別的な羈縻支配を行う必要があったと考えられる。従来から唐の羈縻支配体制は第二可汗国建国後に大きく様変わりすると言われてきた⁽⁸²⁾が、なぜ支配体制が変容を迫られたのか、説明されてこなかった。しかし、羈縻支配時代の突厥羈縻州が膨大な数の遺民を第一可汗国の社会秩序のまま服属させることを前提として成り立っていたと考えれば、第二可汗国の建国によって国家規模の羈縻州の枠組みが崩壊したことにより、支配体制を維持できなくなったのは当然のことだったのである。

略号

『史諱』＝陳新会 1987：『史諱举例（附二種）』台北，文史哲出版社。

『輯繩』＝洛陽市文物工作隊（編）1991：『洛陽出土歷代墓誌輯繩』北京，中国社会科学出版社。

『新釈』＝1960-：『新釈漢文大系』シリーズ，東京，明治書院。

『新編』＝1996-2000『新編漢文選』シリーズ，東京，明治書院。

(82) 唐の羈縻州体制は突厥第二可汗国の復興をもって崩壊したと説明されており〔ex. 護1967, pp. 187-188；堀1994, p. 120〕、ほぼ同時期より唐は羈縻州の支配体制を強化して、中央派遣の漢人が押蕃部落使の称号を帯びて羈縻州経営を行うようになったとされている〔谷口1978, pp. 11-12；村井2003, pp. 39-43〕。

『隋唐五代』＝1991-1992：『隋唐五代墓誌匯編』天津，天津古籍出版社。

『補遺』＝呉 鋼（主編）2005：『全唐文補遺』（第八輯）西安，三秦出版社。

ED＝Clauson, G. 1972: *An Etymological Dictionary of the Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford.

文献目録 ※再録がある場合は、再録時のページのみを提示

荒川 正晴

1997 「クチャ出土『孔目司文書』攷」『古代文化』49, pp. 1-18.

2010 『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋，名古屋大学出版会。

岩佐 精一郎

1936 「突厥の復興に就いて」和田清（編）『岩佐精一郎遺稿』東京，岩佐傳一発行，pp. 77-167.

石見 清裕

1987 「唐の突厥遺民に対する措置」『日野開三郎博士頌壽記念論集 中国社会・制度・文化史の諸問題』福岡，中国書店（再録：石見 1998c, pp. 109-147）。

1998a 「唐の内附異民族対象規定」石見 1998c, pp. 148-175（初出：『堀敏一先生古稀記念論集 中国古代の国家と民衆』東京，汲古書院，1995）。

1998b 「開元十一年「阿史那施墓誌」」石見 1998c, pp. 179-204（初出：唐代史研究会（編）『東アジア古文書の史的研究』東京，刀水書房，1990）。

1998c 『唐の北方問題と国際秩序』（汲古叢書 14）東京，汲古書院。

1999 「ラティモアの辺境論と漢～唐間中国北辺」唐代史研究会（編）『東アジアにおける国家と地域』（唐代史研究会報告第Ⅷ集）東京，刀水書房，pp. 278-299.

2010 「中国隋唐史研究とユーラシア史」工藤 元男／李 成市（編）『アジア学のすすめ 第3巻 アジア歴史・思想編』東京，弘文堂，pp. 23-42.

金子 修一

2003 「則天武后治政下の国際関係に関する覚書」『唐代史研究』6, pp. 17-27.

藏中 進

1995 『則天文字の研究』東京，翰林書房。

氣賀澤 保規

2009 『新版 唐代墓誌所在総合目録（増訂版）』（明治大学東洋史資料叢刊 5）東京，明治大学東アジア石刻文物研究所。

呉 玉貴

2000 「唐朝における東突厥降衆の安置問題に関する一考察」村川 行弘（監修）『7・8世紀の東アジア——東アジアにおける文化交流の再検討——』八尾，大阪経済法科大学出版部，pp. 49-100.

齊藤 茂雄

- 2009 「唐代単于都護府考——その所在地と成立背景について——」『東方学』118, pp. 22-39.

菅沼 愛語／菅沼 秀夫

- 2009 「七世紀後半の「唐・吐蕃戦争」と東部ユーラシア諸国の自立への動き——新羅の朝鮮半島統一・突厥の復興・契丹の反乱・渤海の建国との関連性——」『史窓』66, pp. 1-22.

鈴木 宏節

- 2003 「トニユクク碑文研究史概論」森安 孝夫（編）『シルクロードと世界史』（大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」報告書 第 3 巻）豊中, 大阪大学文学研究科, pp. 113-129.
- 2005 「突厥阿史那思摩系譜考——突厥第一可汗国の可汗系譜と唐代オルドスの突厥集団——」『東洋学報』87-1, pp. 37-68.
- 2006 「三十姓突厥の出現——突厥第二可汗国をめぐる北アジア情勢——」『史学雑誌』115-10, pp. 1-36.
- 2008a 「突厥可汗国の建国と王統観」『東方学』115, pp. 157-141（逆頁）.
- 2008b 「突厥トニユクク碑文笺記——斥候か逃亡者か——」『待兼山論叢』42（史学編）, pp. 55-79.

妹尾 達彦

- 2001 『長安の都市計画』（講談社選書メチエ 223）東京, 講談社.
- 2009 「北京の小さな橋——街角のグローバル・ヒストリー——」関根 康正（編）『ストリートの人類学（下）』（国立民族学博物館調査報告 81）吹田, 人間文化研究機構国立民族学博物館, pp. 95-183.

谷口 哲也

- 1978 「唐代前半期の蕃将」『史朋』9, pp. 1-24.

内藤 みどり

- 1988 『西突厥史の研究』東京, 早稲田大学出版部.
- 1997 「アクベシム発見の杜懷寶碑について」『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』（シルクロード学研究 Vol. 4）, pp. 151-184.

堀 敏一

- 1994 『律令制と東アジア世界——私の中国史学（二）』東京, 汲古書院.
- 1998 『東アジアのなかの古代日本』（研文選書 75）東京, 研文出版.

松田 壽男

- 1970 『古代天山の歴史地理学的研究（増補版）』東京, 早稲田大学出版部.

村井 恭子

- 2003 「押蕃使の設置について——唐玄宗期における対異民族政策の転換——」『東洋学報』84-4, pp. 29-60.

護 雅夫

- 1967 『古代トルコ民族史研究 I』東京, 山川出版社.
1992 「阿史德元珍と Tonyuquq」同氏『古代トルコ民族史研究 II』東京, 山川出版社, pp. 98-132.

森部 豊

- 2010 『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』(関西大学東西学術研究所研究叢刊 36) 吹田, 関西大学東西学術研究所.

森安 孝夫

- 1977 「チベット語史料中に現れる北方民族——DRU-GU と HOR ——」『アジア・アフリカ言語文化研究』14, pp. 1-48.
1984 「吐蕃の中央アジア進出」『金沢大学文学部論集 史学科編』4, pp. 1-85.
2007 『シルクロードと唐帝国』(興亡の世界史 第05巻) 東京, 講談社.

陳 志謙

- 2002 「阿史那忠碑誌考述」『文博』2002-2 (107), pp. 70-74.

葛 承雍

- 2006 『唐韻胡音与外来文明』北京, 中華書局.

李 鴻賓

- 2000 『唐朝朔方軍研究——兼論唐廷与西北諸族的關係及其演變』長春, 吉林人民出版社.

劉 小磊

- 2000 「河南博物院新藏唐代墓誌」『中原文物』2000-6, pp. 62-68.

羅 新

- 2009 「再說噉欲谷其人」『中古北族名号研究』北京, 北京大学出版社, pp. 213-224.

毛 陽光

- 2006 「兩方唐代史姓墓誌考略」『文博』2006-2 (131), pp. 82-85.

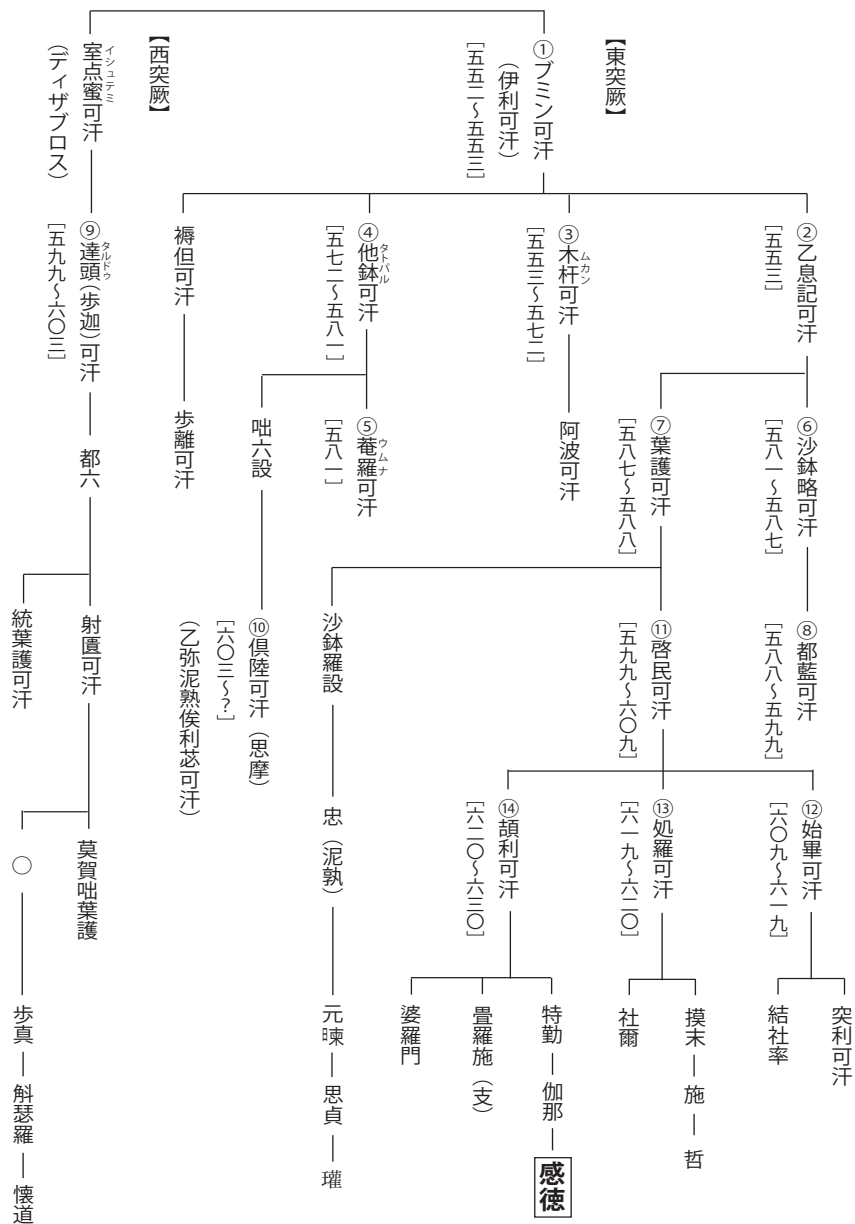
孟 彥弘

- 1995 「唐前期的兵制与边防」『唐研究』1, pp. 245-276.

吳 玉貴

- 1998 『突厥汗国与隋唐關係史研究』北京, 中国社会科学出版社.
2009 『突厥第二汗国漢文史料編年輯考』(全三冊) 北京, 中華書局.

- 徐 松／李 健超（增訂）
2006 『增訂 唐兩京城坊考（修訂版）』西安，三秦出版社。
- 嚴 耕望
1985 『唐代交通圖考（一）』（中央研究院歷史語言研究所專刊之八十三）台北，中央研究院歷史語言研究所。
- 岳 紹輝
1995 「唐《李思摩墓誌》考析」『碑林集刊』3，pp. 51-59.
- 張 広達／榮 新江
2008 「《唐大曆三年三月典成鈇牒》跋」同氏『于闐史叢考（增訂本）』北京，中国人民大学出版社，pp. 106-117（初出：『新疆社会科学』1988-1，1988）。
- 張 乃翥
2009 「洛陽景教經幢与唐東都“感德鄉”的胡人聚落」『中原文物』2009-2，pp. 98-106.
- 張 乃翥／張 成渝
2009 『洛陽与絲綢之路』北京，国家圖書館出版社。
- 趙 振華
2004 「唐阿史那感德墓誌考釈」『史林』2004-5，pp. 82-87.
2009 「唐《阿史那感德墓誌》考釈」同氏『洛陽古代銘刻文獻研究』西安，三秦出版社，pp. 473-485.
- 朱 振宏
2010a 「東突厥処羅可汗与頡利可汗家族入唐後的处境及其漢化」杜 文玉（主編）『唐史論叢（第十二輯）』西安，三秦出版社，pp. 190-214.
2010b 『隋唐政治・制度与對外關係』（文史哲大系 238）台北，文津出版社。
- Hirth, F.
1899 Nachworte zur Inschrift des Tonjukuk. In: Radloff, W. *Die alttürkischen Inschriften der Mongolei*. Zweite Folge, St. Petersburg, pp. 1-140.
- Кляшторный, С.
1964 *Древнетюркские рунические памятники как источник по истории Средней Азии*. Москва.
- Liu, M.
1958 *Die Chinesischen Nachrichten zur Geschichte der Ost-Türken (T'u-küe)*. Wiesbaden.
- Zhang, Guanda / Rong, Xinjiang
1987 Sur un manuscrit chinois découvert à Cira près de Khotan. *Cahiers d'Extrême-Asie, Revue de l'Ecole Française d'Etrême-Orient* 3, pp. 77-92.



【系図】 ※森安 2007, p. 149 ; 内藤 1988, p. 256 をもとに作成
丸囲み数字は第一可汗国における可汗即位順